

パレスチナ地域で破壊された村落地誌の研究 —ナクバのオーラルヒストリーの考察—

金城 美幸

立命館大学衣笠総合研究機構 ポストドクトラルフェロー

緒 言

長きにわたって紛争状態にあるパレスチナ・イスラエル地域では、自社会の歴史記述という行為は、各社会の政治的要求を下支えする重要な営為であり、認識の決定的対立が表出する場でもある。両社会においてとりわけ量産されてきたのは、紛争構造を作り出した「1948年」をめぐる歴史記述である。この年に関して、両社会の歴史認識の隔たりは大きい。ヨーロッパのユダヤ人問題の解決をパレスチナにおけるユダヤ人国家設立に求めたシオニスト・ユダヤ人たち（「シオン」とはエルサレムを指す）は、イスラエル建国を「民族の悲願」と主張し、1948年にそれを成し遂げた。イスラエルにとっての「1948年」は「独立戦争」であり、あらゆる逆境に打ち勝った栄光の物語として語られる。しかし、イスラエル建国は先住者パレスチナ人の大規模な追放と一体となっていた。このとき、400以上のパレスチナ人村落が破壊され、住民の約60%が難民となり、パレスチナ社会の崩壊がもたらされた。パレスチナ人社会ではこの出来事を「ナクバ al-nakba（アラビア語で「大災厄」）」と呼び、民族的悲劇として語り継いできた。

以降、両社会の歴史言説は非対称な形で発信されてきた。イスラエルでは歴史言説の生産・発信が国家事業として取り組まれてきた一方、民が離散状態にあり、独立国家建設を達成できていないパレスチナでは、文字史料の収集から専門的研究の生産・発信・社会的流通に至るまで、さまざまな困難を抱えてきた。

こうした概況の中、1980年代以降のパレスチナ人の言説空間のなかにはある興味深い傾向がある。それは、難民たちのオーラルヒストリーに基づいてナクバ時に破壊された村落地誌が数多く登場していることである。これらはもっぱら離散パレスチナ人の間でローカルな形で生み出されてきたものだが、近年の研究¹⁾のなかで研究対象化されつつある。

この先行研究の主たる関心は、これらの地誌を①パ

レスチナ人の指導部の影響力が低下するなかでの民衆の主体化、②ナクバ体験者世代の消失を前にしたナクバの記憶への関心の高まり、③難民の間での再ネットワーク化を求める意識の高まりという、パレスチナ社会内での3つの文脈のもとで評価することであった。

対して本研究では、イスラエルに対する対抗的な歴史記述というナショナルな文脈において、これらローカルな地誌が果たしうる役割を検討し、その意義と課題を明らかにする。そこで着目するのは、1980年代後半から90年代にかけてイスラエル占領下のヨルダン川西岸地区ビルゼイト大学 (Jāmi'at Bir Zayt) で設立された研究所「パレスチナ社会研究・記録センター Markaz al-Wathāiq wa al-Abhāth al-Mujtama'a al-Filasṭīni」(英語名称は Center for Research and Documentation of Palestinian Society, 以下「CRDPS」) より出版された村落地誌シリーズ『破壊されたパレスチナ人村 al-Qurā al-Filasṭīniya al-Mudammara』である。同シリーズでは、1冊ごとに1村の地誌が収められており、全22冊、22村についての地誌が出版された。

オーラルヒストリーという手法は、欧米・日本の研究では今日こそ歴史学の一領域として認知されるに至っているが、こうした歴史学界での受容に至るまでは長い時間を要した。そこで主として問題とされたのは、オーラルヒストリーの史実性である。今日までに、証言の文脈、証言者と研究者の関係、あるいは戦争犯罪のような文書史料の破棄・隠ぺいが行われた出来事の記述など、口述証言の多岐にわたる活用法が検討されており、研究が進展している²⁾。しかし、とりわけ戦争犯罪の証拠として口述証言に依拠しようとするとき、犯罪やその責任を認めない保守的立場からその史実性を非難する声は絶えない。同様のことはナクバのオーラルヒストリーにも当てはまり、イスラエルの歴史家からは客観性に欠く記述として非難・排除されてきた。本研究は、オーラルヒストリーに基づく地誌が、この史実性の問題をどのよう

に取り扱っているかを、その葛藤と共に明らかにするものである。

この研究において同シリーズに着目する意義は3つある。第一に、同シリーズはパレスチナ人のオーラルヒストリーに基づく地誌の源流に位置しているため、以降の言説の基礎文献の構成を明らかにできる。第二に、離散パレスチナ社会のなかでも、同シリーズはイスラエル占領下という「前線」において発信されていることから、イスラエルの歴史言説との影響関係のなかで生み出される地誌にアプローチできる。第三に、同シリーズは学術機関において練り上げられた研究であり、それゆえ社会を代表する言説という自負をこれらの地誌の中から読み込める。よって本研究では、オーラルヒストリーというローカルな関係のなかで生み出される語りを、ナショナルな言説へと醸成させる場における言説構成を明らかにする。

結果と考察

同シリーズは2名のCRDPS所長によって主導されたため、分析に際しては2期を区別し、テキスト分析と著者へのインタビュー調査を行った。第1期は人類学者シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā'na) がセンター長を務めた1986～91年である。その後、イスラエル軍令による大学閉鎖 (1988～92年) や資金の問題でプロジェクトは中断するが、1993年に歴史家サーリフ・アブドゥル・ジャワード (Salih 'Abdul Jawād) が新センター長となり、98年まで研究が続いた (表1)。

両期間とも、村落の地誌的特徴を収録している点において共通している。どの地誌も、まずは村の来歴の記述にはじまり、村落名の由来、村落の構成単位である父系親族集団 (ハムーラ ḥamūla) の来歴、村民名の記録、景観・遺構の説明などの社会的構成、民話・寓話、英雄伝、迷信や衣装、歌に至るまでの文化的構成を説明している。これらは従来のパレスチナ研究では史料の不在のために空白となってきた村落の社会構造を告げる史料としての価値がある。多くの村落は、村長 (ムフタール mukhtār)・長老 (シャイフ shaykh) を中心とした村内委員会があり、儀礼等の法規制定や貸出基金の共同運営など、村内自治を行ってきた。また、アラブ世界での婚姻は同一父系親族集団内での父方いとこ婚が典型であり、この点は同地誌シリーズでも確認できるが、典型を外れた婚姻において経験された困難等も記録されている。また、村民の交流の場としては、有力家族の家屋の

一室に設けられたゲストハウス (マダーファ madāfa) がその機能を果たし、村民の集いの場に限らず、村外の訪問者の歓待の場となっていた。

同シリーズは、以上のような「伝統的」村落に対する近代化の影響を、当時の村民の経験に則した生き生きとした言葉で伝える。パレスチナ社会の近代化は早くも1870年代のオスマン帝国の近代化政策にその端緒を見るが、それが強度と速度を伴って村落に劇的な転換をもたらすのは、1918年からの英パレスチナ委任統治以降だった。まずは社会的変化として紙幅が割かれるのは、教育と医療に関してである。複数の村落で男女別公立学校が設立され、学校教育が導入された。同時に、交通網の整備や公共交通機関の導入、村落間でのバス共同運営などによって交通手段も増え、他村の児童の通学も見られるなど村落間での交流関係が増していった。医療面では、西洋医学を携えて移住したユダヤ人医師のもとに通う村民の姿も描かれている。さらに英委任統治期の村落の経済構造の変化は、村民の暮らしを一変させた。納税方法の変化や近代サービスの享受のために現金を要するようになった村民たちは、伝統的な自給農業から、商業・建設業・鉱業・採石業・工業などの賃金労働者へと移行し、農村から都市への人口移動もはじまった。

これら地誌の記録は両期間に共通しているとはいえ、その記述スタイルは大きく違っている。最も大きな違いは、口述証言と史実性に対する態度である。

人類学者カナアナが主導した第1期は、口述証言は記録の対象であり、かつ地誌はもっぱら口述証言によって記述された。一般にアラビア語テキストは、「書き言葉」である正則アラビア語 (フスハー fushā) で記述されるが、同シリーズでは証言の引用は方言 (アーンミーヤ'anmīya) で記述されている。このことから、第1期テキストは方言を解する読者に宛てられた、ローカルな性格をより強く宿している点が指摘できる。

また、第1期地誌では難民たちに情報提供を呼びかけており、書き手主体で村落史を作るのではなく、難民との共同執筆が目指されている。結果、こうした地誌は複数の語りの群となり、多様な視点を含んで社会像を豊かにする記述となっている。

しかしこの第1期地誌は、単にローカルな言説としてのみ発信するのではなく、その後景にはナショナルな物語を潜ませている。第1期地誌では、表紙の装丁にパレスチナの地図を用いており、結果的に各村落をパレスチナという全体の一部に位置づけている。結果、ナシヨナ

表1 『破壊されたパレスチナ人村』 シリーズ一覧

(1) 第1期 センター長：シャリーフ・カナアナ (1986~1991年)

No.	刊行年	村落名	地区	著者	頁数
1	1986	アイン・ハウド (‘Ain Ḥawḍ)	ハイファー (Ḥayfā)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) バッサム・カアビー (Bassām al-Ka‘bī)	58
2	1986	マジュダル・アスカラーン (Majdal ‘Asqalān)	ガッザ (Ghazza)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ラシャード・マダニー (Rashād al-Madani)	220
3	1986	サラマ (Salama)	ヤーファー (Yāfā)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ルブナ・アブドゥルハーディー (Lubna ‘Abd al-Hādī)	83
4	1987	デイル・ヤーシーン (Dayr Yāsīn)	アルクドゥス (Al-Quds)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ニハード・ゼイターウィ (Nihād Zeitāwī)	67
5	1987	イナーバ (‘Ināba)	ラムラ (al-Ramla)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ムハンマド・イシュタイヤ (Muḥammad Ishtayya)	58
6	1987	ファールージャ (Al-Fālūja)	ガッザ (Ghaza)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ラシャード・マダニー (Rashād al-Madani)	118
7	1990	ルッジューン (Al-Lujjūn)	ハイファー (Ḥayfā)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ウマル・マハーミード (‘Umar Maḥāmīd)	75
8	1990	カウファハ (Al-Kawfakha)	ガッザ (Ghazza)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ラシャード・マダニー (Rashād al-Madani)	63
9	1990	アブー・キシク (Abū Kishk)	ヤーファー (Yāfā)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ルブナ・アブドゥルハーディー (Lubna ‘Abd al-Hādī)	61
10	1991	ミスカ (Miska)	トゥールカリム (Ṭūlkarim)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) バッサム・カアビー (Bassām al-Ka‘bī)	85
11	1991	クファル・サーバー (Kfar Sābā)	トゥールカリム (Ṭūlkarim)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) バッサム・カアビー (Bassām al-Ka‘bī)	75
12	1991	リフター (Liftā)	アルクドゥス (Al-Quds)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ルブナ・アブドゥルハーディー (Lubna ‘Abd al-Hādī)	52
13	1991	クファル・ビルアム (Kfar Bir‘am)	サファド (Ṣafad)	シャリーフ・カナアナ (Sharif Kanā‘na) ムハンマド・イシュタイヤ (Muḥammad Ishtayya)	55

(2) 第2期 センター長：サーリフ・アブドゥル・ジャワード (1993~1998年)

No.	刊行年	村落名	地区	著者	頁数
14	1994	カークーン (Qāqūn)	トゥールカリム (Ṭūlkarim)	アブドゥル・ラヒーム・ムダウワル (‘Abd al-Raḥīm al-Mudawwar)	160
15	1994	イムワース (‘Imwās)	ラムラ (al-Ramla)	ハイダル・ヤアクーブ・アブー・グーシュ (Ḥaydar Ya‘aqūb ‘Abū Ghūsh)	250
16	1994	ズイルイーン (Zir‘īn)	ジェニン (Jenīn)	イブラーヒーム・ジャマール・マルイー (‘Ibrāhīm Jamāl Marī)	250
17	1994	ループヤー (Lūbyā)	ティバリーヤ (Ṭībiryā)	イブラーヒーム・ヤヒヤ・シハービー (‘Ibrāhīm Yaḥya Shihābī)	110
18	1995	アブー・シューシャ (Abū Shūsha)	ハイファー (Ḥayfā)	ヤアクーブ・ナスル (Ya‘aqūb Naṣr) ファーフーム・シャラビー (Fāhūm al-Shalabī)	200
19	1995	ティーレット・ハイファー (Ṭīret Ḥayfā)	ハイファー (Ḥayfā)	アブドゥル・ラヒーム・ムダウワル (‘Abd al-Raḥīm al-Mudawwar)	200
20	1995	ベイト・ジブリン (Beit Jibrīn)	アルハリール (al-Khalīl)	アブドゥル・アズィーズ・アラール (‘Abd al-‘Azīz ‘Arār)	330
21	1997	アルダワーイマ (al-Dawāyma)	アルハリール (al-Khalīl)	アフマド・アダールラバ (Aḥmad al-‘Adāraba)	273
22	1998	ベイト・ナバーラー (Beit Nabālā)	ラムラ (al-Ramla)	アフマド・ハリール・カーイド・フサイン (Aḥmad Khalīl Kāyd Ḥusayn)	272

(出所) 筆者作成

ルなパレスチナという枠組みを前提に置きはするものの、しかしその地誌の記述と併せて検討してみれば、各村落に均質なイメージに当てはめるのではなく、各村落をユニークな構成要素と位置付けていることが発見できる。ここで描かれるパレスチナ社会は、一定の領域を特定の性質によって包括する共同体ではなく、掘り起こしの後にはより豊かな文化的要素を内包した共同体が現れると想定されている。

これに対して歴史家アブドゥル・ジャワードが主導した第2期では、序文にイスラエル側の歴史言説への対抗意識が明確に示されるなど、ナショナルな関心からの歴史記述としての性格が前面に出されている。第2期地誌が目指したのは、正しい情報の記述、すなわち史実性の追求であった。そのため、証言を増やすだけでなく、文字史料や先行研究とも照合させ、それにより研究としての包括性と完結性を追求したといえる。

それゆえ証言に対する姿勢も第1期とは異なり、第2期ではオーラルヒストリーは、ほかに手段がないがゆえの戦略であるとされ³⁾、その前提には文字史料と口述史料の間のヒエラルキーがある。よってここでの証言の重要性とは、あくまで文字史料との関係において生じる相対的なものと理解されている。証言を証拠能力ある史料の一つにしっかりと位置づけることで「信頼に足る」歴史記述を創りあげ、イスラエルの言説に対抗しようとしているのだ。

本研究から2期にわたるCRDPSプロジェクトの方法論と問題関心の差異が明らかになった。両期間とも難民の証言に基づく村落史の構築を目指しながらも、第1期はイスラエル人との論争にはとらわれず、村落の多様性を掘り起こし、パレスチナ社会像をより豊かにせんとするものだった。そこでは難民の証言は手段であり目的

だった。対して第2期では、イスラエル人との論争点を明らかにすることを目的とし、結果、村民の追放という主題をより包括的かつ詳細に述べるテキストとなり、ナショナルな言説の確立を目指すものになった。

現実政治に照らせば、上記二つの方法論のうちより説得力をもつのは後者である。現実政治では、政治課題に直接回答し、何らかの代表性が保証された語りの形式が求められる。この観点からはナショナルな歴史記述がもつ役割は大きい。しかし第1期地誌が明かす村落史の人間の側面は、近代化・資本主義化・都市化の流れと国際社会の政治決定から忘れ去られかねない村落の姿を映す。それはパレスチナ社会を翻弄し続ける現実政治に対する、確かな抵抗の言説なのである。

本研究の取りまとめとして、日本中東学会年鑑第30巻1号（2014年7月発刊）に研究ノート「破壊されたパレスチナ人村落史の構築—対抗言説としてのオーラルヒストリー」を発表した。

謝 辞

本研究の成果は、公益財団法人三島海雲記念財団の研究助成によるものです。ご協力を賜りました関係者の方々には心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) R. Davis: *Palestinian Village Histories: Geographies of the Displaced*, Stanford University Press, 2011.
- 2) P. Thompson: *The Voice of the Past: Oral History*, Oxford University Press, 1978. (= 酒井順子訳：記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界, 青木書店, 2002.)
- 3) S. A. Jawad: *Israeli and Palestinian Narratives of Conflict: History's Double Helix* (R. I. Rotberg, ed.), pp. 72-114, Indiana University Press, 2006.